

多賀台 奈良 孝次郎

1. 〈「市川いちご」から「八戸いちご」へ〉

市川地区の願成寺の高台に立って眼下に広がっている田んぼを眺めてみると、田んぼを取りまくようにして、たくさんのビニールハウスがある。その多くは、いちご栽培のハウスである。市川地区のいちご栽培は地域農業の成功した例としてよくあげられる。はじめ、「市川いちご」としてスタートし、栽培地帯が市川地区から階上や百石までも拡大。名称も「八戸いちご」としてブランド化が進んだ。今回は栽培のはじまりから軌道にのるまでを取り上げてみた。

この稿は、あらましを木村仁松氏から聞き、さらにデーリー東北新聞社のいちご栽培にかかわる記事を参考にして構成したものである。



2. 〈いちご栽培のはじまりと7名のさむらい〉

市川地区のいちご栽培のはじまりは、今から50年以上前に遡る。当時、地区の農家のかなりの人たちは、生活のために出かせぎをしていた。とくに、北海道(利尻)へ出てニシン漁業に従事していた。ところが昭和28年(1953)、大嵐のために22名の人命を絶った。

当時の多賀小学校長・細川重計氏は、地元で現金収入を得るためにどうしたらよいかを考え、いちご栽培にたどりついた。それにこたえて地元の7名の農家が熱心に取り組んだ。木村徳男・石田若松・小西武五郎・木村仁三郎・木村長太郎・和泉忠一郎・木村仁松の各氏である。彼らは機会あるごとに集会を重ね、話題はいつもいちご栽培のことだった。そのことから「いちご栽培7名のさむらい」といわれるほどだった。(以下、次号へ)

鈴木與兵衛氏と五戸八幡宮(2)

〔「轟木村與兵衛先祖也」〕

轟木下 木村 隆一

3. 〈「^{ぬかのぶ}糠部五郡小史」には〉

「羽黒山の中腹に一人の鍛冶がいた。子どもの名は月山。この山中で刀を鍛えること多年、常に八幡宮を信じて名作の人とならんことを願っていた。ある年、湯殿山で異人(仙人・神人)に逢う。この時神体が授かり、朝夕にこれを敬う妻は、二人の男の子を産む。兄は太郎丸、弟は次郎丸。成長して名工となり月山と銘す。兄の太郎丸は修行のために奥州に下り、五戸通りの轟木村^{かきめのだい}風穴平^{れいげん}に来住す。そして小屋の傍らにこの神像を置き、業を祈り病を祈る。その靈験鏡の如し」とある。

※五戸八幡宮の祭神：誉田別命(ほんだわけのみこと)

4. 〈百石村にあった専念寺〉

千年以上も前に小川原湖畔に開創された専念寺^{げんき}は、元亀元年(1570年、今から438前)に百石村の根岸より轟木村を経て五戸に移転し、現在に至っている。

5. 〈五戸八幡宮：轟木村與兵衛先祖也〉

前号の「五戸月山正八幡宮建立由来記」の最後には「轟木村與兵衛先祖也」と記されている。この與兵衛は轟木の鈴木與兵衛氏であり、専念寺が鈴木與兵衛氏と関わりがあったこと、専念寺の檀家であること、また「市川を調べる4・5号」に掲載された鈴木玲子氏による與兵衛様と権現様等によって、五戸と関係の



(五戸八幡宮正面の拡大図)

↑深いことが明らかである。このようなことからかつて盛岡藩であった下市川との一体感をより深めている所である。

*資料:「五戸町誌」「流れる五戸川」「青森県の神社」

